

マルクス主義経済学前進のための 基本的文献の刊行について

—主としてマルクス『剰餘価値学説史』新版を中心とする文献紹介—

野々村 一雄

I

マルクス主義経済学の研究者にとって、最近はかなり忙しいときがやってきた。1952年には、「創造的マルクス主義」(スターリン)を身を以て示した、スターリン『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』И. В. Сталин: Экономические проблемы социализма в СССР. がでたかと思うと、1953年は、3月14日がマルクス死後70年、5月5日が生誕135年にあたるので、ドイツ統一社会党 Sozialistische Einheitspartei Deutschlands の機関誌“統一” Einheit が『カール・マルクスの年、特集号』Sonderheft, Karl-Marx-Jahr, April 1953. を出したほか、かなり多くの記念出版が企画・発刊された。そのうち、経済学に限っていうと、第1にあげるべきものは、Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Oekonomie (Rohentwurf) 1857 bis 1858. Anhang 1850—1859.* Berlin Dietz, 1953. であった。この書物は、『経済学批判』『資本論』『剰餘価値学説史』を頂点とする、マルクスの経済学的研究の全體の足どりやプランをしめすものとして、こんごのマルクスおよびマルクス主義研究の前進のために、貴重な文献であった。

その他、『経済学批判』、『資本論』、『マルクス=エンゲルス往復書簡集』など、既に、モスクワのマルクス=エンゲルス=レーニン研究所によって公刊されたものの再版が出されたほか、1954年には、はじめて、資本論に関するマルクス=エンゲルスの書簡集のドイツ語版が出た。—Karl Marx / Friedrich Engels, *Briefe über „Das Kapital.“* Besorgt von Marx-Engels-Lenin-Institut beim ZK der SED. Dietz Verlag Berlin, 1954. これは、その序文によると、はじめ1948年にモスクワのマルクス=エンゲルス=レーニン研究所からそのロシア語訳がはじめて出されたものの、原本で、これがドイツ語で出されるのは今回がはじめてであり、また、『資本論』に関してマルクスおよびエンゲルスが彼等以外の第三者に與えた書簡は、ドイツでは今回始めて刊行されるものであるという。この編集には、若干疑問點があり、『資本

論』に関するマルクス=エンゲルスの全ての書簡を収めているとはいいい難いが、ともかく、これによって、資本論の研究に側面的な光が、もうひとつ加えられたことになる。

1954年という年は、マルクス経済学の文献誌上、さらに2つの出版が附加えられるべき年である。そのひとつは、ここに紹介される豫定の、『剰餘価値学説史』の改訂新版の第1巻であり、その第2は、ソ同盟の代表的経済学者の共著にかかる、『経済学教科書』の刊行である。まず、そのそれぞれについて、原題名を、ここへ、書きつけておこう。—『剰餘価値学説史』K. Маркс «Теории прибавочной стоимости» (IV том «Капитала».) Часть I. Институт Маркса-Энгельса-Ленина-Сталина при ЦК КПСС. Государственное издательство политической литературы. Москва 1954. XXIV+439 стр. 『経済学教科書』Академия наук СССР. Институт экономики. Политическая экономия. Учебник. Государственное издательство политической литературы. Москва 1954.

以上が、最近刊行された、マルクス経済学の基本的な諸文献の、おそらくは、全部である。

II

このメモの主たる仕事である『剰餘価値学説史』の紹介にはいるまえに、私は、たった今手にいれたばかりの、『経済学教科書』についての簡単な紹介ならびに感想をのべることを抑ええない。走り書き的に、少し書きつけておこう。

『経済学教科書』は、ソ同盟科学アカデミヤ経済研究所の編集・出版にかかり、実際にその執筆に参加したのは、科学アカデミヤ正會員カー・ヴェー・オストロヴィッチャノフ К. В. Островитянов, 同通信會員デー・テー・シェピーロフ Д. Т. Шепилов, 同通信會員エリ・アー・レオンティエフ Л. А. Леонтьев, レーニン名稱全同盟農業科学アカデミヤ正會員イー・デー・ラブテフ И. Д. Лаптев, イー・イー・クジミノフ教授 И. И. Кузьмин-

об, 経済学博士エリ・エム・ガトフスキー Л. М. Гатовский, 科学アカデミア正会員ペー・エフ・ユーディン П. Ф. Юдин, 同通信会員アー・イー・パシュコフ А. И. Пашков, 経済学博士候補ヴェー・イー・ベレスレギン В. И. Переслегин で, 統計の作製や加工には経済学博士ヴェー・エヌ・スタロフスキー В. Н. Старовский が當り, 最後の取まとめは, オストロヴィチヤノフ, シェピーロフ, レオンティエフ, ラプチェフ, クジミノフ, およびガトフスキーが當ったという。

序文によると, この教科書の作成については, 1951年11月に, 黨の中央委員会が召集した経済学討論會がかなり多くの意義をもっているという。ここで作成された草案や諸批判をめぐって, 前記のスターリンの著書が出されたことは, 既に周知のところである。

この教科書は, すでに, 前記のスターリンの遺著にも示されているように, ソヴェート同盟における経済学の研究および教授の基本となる書物である。したがって, 『ソ同盟共産黨小史』История ВКП (6), 1932 г. と同様, 公的な性格をもつものといえる。ただ, 右の『ソ同盟共産黨小史』とは違い, 讀者の批判によって改訂したいといっている (стр. 4) 點は, 注目すべきであろう。

書物としての構成は, 3部に分れていて, その第1部は「前資本主義的生産様式」, その第2部は「資本主義的生産様式」, その第3部は「社會主義的生産様式」となっていて, 3部あわせて全部で42章, それに序文と結論がついている。また, 各章には, その章の「要約」がつけてあって, 讀者には便利であるが, 索引はない。

本書の紹介は, 既に, プラウダ Правда (1954年10月8日), イズヴェスチヤ Известия (1954年10月1日), トルード Труд (1954年10月16日) に, それぞれ出ているし, また, 本書についての内容的な紹介は, 次號で, 岡稔講師によってなされるはずである。ここでは単に, 私が讀んだ部分についてのみ, 簡単な感想をのべてみよう。

友人の一人にすすめられて, 私は, その「結論」を讀んでみた。そして, そこで必要となった限りにおいて, 序論を拾いよみした。まず, 序論では, 経済学の對象と方法とが論ぜられる。序論において, 経済学は, つぎのように定義されている。——「経済学は人の, 社會的=生産的, したがってまた経済的諸關係の發展に関する科学である。それは, 人類社會の發展の種々の段階における, 人類社會の物質的富の生産と分配を支配する法則を明らかにするものである。」(стр. 10.) ここで問題となる點は, エンゲルスが『反デュリング論』で提起して以來の問題たる, 狹義の経済学と廣義の経済学という,

経済学の對象に関する問題であり, したがってまた, 社會主義的生産關係に関する経済学の可能性に関する議論である。本書の序文は, 上のように定義することによって, 経済学を原始共産制から共産主義へ通ずる一切の人類社會の経済的諸關係に関する科学であると規定し, この論議を解決している。

こういう考え方から, さきにのべたような, 本書の篇別構成——第1部 資本主義以前 (したがってそこには原始共同社會, 奴隷制社會および封建制社會がそれぞれ1章ずつわりあてられている), 第2部 資本主義, 第3部 社會主義——が必然的となるのであるが, それらをのべたあとで, 「結論」では経済学の研究の主要な結論を, つぎの5つに要約している。

その第1は, 経済的發展の必然性と経済的發展の合法則性の主張である。その發展の終點は共産主義であるという。「経済学は, 労働者階級および全ての勤勞者に, 共産主義の勝利に對する確信を與え, この勝利が歴史的發展の全先行過程によって制約されていることを示す。」(стр. 626)

第2に, それは, 経済学が, 資本主義諸國, 植民地, 半植民地諸國の労働者階級に, その現存狀態から脱出する道をおしえるものであると主張する。このところでは, 資本主義から社會主義への平和的轉生が不可能であると述べている。(стр. 626)。

第3にそれは, 経済学が, 合法則的な社會主義的經濟建設の方法を教えるものであり (стр. 627), また, その「歴史的實驗」の一般化を行うものであるという (стр. 628)。こういう考え方によって, また, 社會主義の經濟学を經濟学の中に含ませているわけである。

第4に, それは, 社會主義社會の現實の働らき手に, その活動のために, 詳細な指針となるという。したがって, これによって, 社會主義的經營經濟学を經濟学の中に含ませているようにとれる。

第5に, それは, 経済学の研究は, 社會主義經濟の現實が資本主義經濟の現實に決定的に優越していることを示すという。そして, 社會發展の窮極の目標は, 共産主義であると主張して, 全巻が終っている。

以上のような考え方にたてば, 當然, 社會主義經濟の科学的説明やその科学的管理方法に多くの頁がさかれることになる。そういう意味では, 第3部社會主義的生産様式は, 第1部第2部にもまして, 注目すべき勞作であろう。私が, 第3部を特に拾いよみした限りの感じからいって, 敘述がきわめて lakonisch かつ kategorisch であった。私自身はちようど, ソヴェート價格制度について當ってみたのであるが, 私が必要とした事項につい

て、整然たる分類が示され、敘述は定言的であった。ただ、頁数の関係で、内容がきわめて簡単なため、本書は基本書として、これの詳細な肉付けは、他の經濟書や、われわれ自身の自主的な研究に委ねらるべきであろう。

III

マルクスの『剰餘價值學說史』は、既に、1905—1910年にかけて、カウツキー Karl Kautsky 編纂で、出されていて、大抵のマルクス主義者ないし經濟學者にとってなじみの深い書物である。

ところが、この本の編集にあたってカウツキーのとした態度は、従来からも批判があり、たとえば 1934 年に出たローゼンベルグの經濟學史も、この點に言及しているというし、『資本論』のソヴェート版の序文では、その編集者のアドラツキーは、「剰餘價值學說史」の科學的再版を豫告したのである。その編集プランが、はじめて体系的に示され、同時に、カウツキーの編纂方法の誤謬が具體的に指摘されたのは、1950年9月が最初であり、その仕事は、ヴェ・ブルシリンスキー、イー・プレイス署名の、つぎのような論文とその附録で示されている。— В. Брушлинский и И. Прейс, О подготовке научного издания «Теорий прибавочной стоимости» К. Маркса. «Вопросы экономики», No. 9, 1950 г.; Проект проспекта научного издания «Теорий прибавочной стоимости» К. Маркса (рукописч IV тома «Капитала») «Вопросы экономики», там же. これは、今度のロシア語新版の研究所序文とかなり多くの共通箇所がある。(なお、以上の論文のすぐれた完譯は寺村鐵三氏によって『經濟學雜誌』25の4號に與えられている。)

今度發行されたのは、その3分の1を成す第1部(第1—7章および附録)であって、主として重農主義者とアダム・スミスの諸見解の分析にあてられた部分である。本書の序文には、剰餘價值學說史全3部に對する、内容紹介や、各部の内容や、カウツキーの編纂方法の批判などがのべられているので、それによってみると、第2部は、主としてリカード學說の批判にあてられ、同時に、その一部分として、スミスの費用價格論と地代論の分析がはいっており、第3部では、主としてリカード學派の解體と、「經濟學者に對するプロレタリア的反對者たち」の最初の出現を取扱っている。また、第3部の附録である、「所得とその源泉」は、『資本論』第3卷の最後の諸章と關連があり、最近のわれわれの問題たる國民所得論の研究に關して、この部分の刊行は、大きな期待をよせられる。

以上は、この著作の、科學的再版の形式的な側面にす

ぎない。以下、本ロシア語版第1卷にしたがって、若干内容的な吟味をおこなってみよう。

こんどの出版の序文は、マルクスおよびマルクス主義經濟學の研究に對して、ひとつの問題をなげかけている。それは、わがくにでもかなり論議された問題である、資本論のプランの問題を、剰餘價值學說史の成立史およびマルクスの經濟學體系における剰餘價值學說史の位置という點からとりあげて、一定の見解を示していることである。それを要約すれば、つぎのとおりである。

まず、マルクスが 1858—1862 年に草記した『經濟學批判』のプランは、つぎのとおりである。(стр. IV)

- | | | |
|--|---|--|
| <p>I 資本
〔序論—商品および貨幣〕</p> <p>a) 資本一般</p> <p>b) 諸資本の競争</p> <p>c) 信用</p> <p>d) 株式資本</p> <p>II 土地所有</p> <p>III 賃労働</p> <p>IV 國家</p> <p>V 外國貿易</p> <p>VI 世界市場</p> | <p>1. 資本の生産過程</p> <p>2. 資本の流通過程</p> <p>3. 兩者の統一、あるいは資本および利潤</p> | <p>1. 貨幣の資本への轉化</p> <p>2. 絶對的剰餘價值</p> <p>3. 相對的剰餘價值</p> <p>4. 兩者の結合</p> <p>5. 剰餘價值諸學說 (Теории прибавочной стоимости)</p> |
|--|---|--|

この表式をかかげたあとで、研究所の序文は、つぎのようにのべている。「この圖式によって明らかなのは、『剰餘價值學說史』《Теории прибавочной стоимости》が、最初マルクスによって「資本一般」にかんする彼の理論的研究のうち、資本の生産過程の問題にあてられた部分にたいする歴史的補説として計畫されたということである。」(стр. IV)

「マルクスのプラン問題」について、重要な指摘は、この序文のなかで、剰餘價值學說史が、はじめ、「資本一般」の第1部第5篇となっていた位置づけから、最終的に現に『資本論』の第4卷となるにいたった理由をのべている點である。研究所の序文は、その點について、「資本一般」以外の部分が、つぎつぎと「資本一般」へくりいれられ、したがってまた、それらを含めたものとしての「資本一般」が現行の『資本論』の内容であるといっている。序文は、つぎのようにいっている。—「『資本論』に關するマルクスの研究過程において、最初彼が「資本一般」の部門についてのみ立案したところの三分割制の區分 (1. 資本の生産過程, 2. 資本の流通過程,

3. 両者の統一)の決定的な意義がますますはっきりとなった。この三分割制の区分は、最初の計畫ではマルクスが「資本一般」の部門にもちこんだ諸問題の枠に入らなかった諸テーマ(たとえば、競争、信用、地代)さえも、つぎつぎとこれに加えられたほど、重要かつ深刻なものとなった。資本主義にかんするマルクス主義経済学のあらゆる理論的諸問題をつぎつぎに吸収した『資本論』の3つの理論的部分のこの編成過程と平行して、歴史的=批判的研究は別個の著書——すなわち『資本論』の第4部——としてのみ與えられねばならないというマルクスの確信はますます強められた。(cc. V—VI)

以上の指摘は、『資本論』の cover する問題領域がどれだけのものであるかという、従来「プラン論議」にとって、かなり決定的な意味をもつようであるが、どうであろうか。これによれば、マルクスの『資本論』は、一應前記のプランの I—VI と、あるいは少なくとも I—III までとして、考えられていたようにもとれる。とはいうものの、私は、いわゆる「プラン問題」の専門家でもない。また、右の序文とほぼ同じ内容をもつブルシリンスキー=プレイスの論文が『経済の諸問題』に発表されたのが1950年9月、その完譯が『経済学雑誌』に寺村鐵三氏によって出されたのが1951年10月であるので、おそらく、それ以後にも、この指摘をとりいれてのプラン論争が展開されたであろうことは、想像に難くないが、私自身、不勉強の故に、その点については、少しもよんでいないので、決定的なことは、いえない。ただ、以上のことが、マルクス=エンゲルス=レーニン=スターリン研究所の名前で今回公けにされたことは、一應ここに指摘しておくべきであろう。

つぎに、こんどのロシア語版新版の舊版との差異についてのべると、それは、大體つぎのような點であろう。

1) カウツキー版に比して、マルクスの原稿がそのまま生かされていること、したがって量的にも、より大きなものとなっていること。編集者は、『資本論』との重複箇所があるから手稿のうちから一部分削除せねばならないといったエンゲルスの指示をも、これをエンゲルス自身にのみ妥當することだとして、マルクスの手稿を全然削除していない。

2) 配列の順序は、マルクスの手稿そのままである。

カウツキー版に比して異なる點は、カウツキー版が、マルクスの手稿の改ざんである點を別としても、各経済学者の活動時期を主とした、純然たる歴史的な順序に従ったのに對し、半ば歴史的、半ば論理的な順序に従っている。だが、これによって、取扱われている諸問題の内的な諸關連、問題史的な序列がはっきりしたと主張されている。

3) カウツキーによる見出しの抹殺・改悪、見出しおよび敘述内容の「客観主義的=無感覺的性格」(ср. XII)へのひき下げが復元されていること、これによって、マルクスのブルジョア主義批判が、もとのままの鋭い、革命的形態で示されていること。——以上のような點であろう。

本書がロシア語譯として、ドイツ語原文のままに出されなかったことが、すでに1950年にその篇別まで發表しておきながら、今日までその公刊がおくれたことの主たる理由で、おそらくこの間に、ドイツ語のロシア語へのおきかえがなされたものであろう。このことは、どういふ風に解したらいいのであろうか。さきあげた『資本論』に關する書簡集』についても、同じことがおこっているが、やはり、ロシアにおけるロシア第一主義ではなかろうか。しかし、おそらく、近いうちに、ドイツ語版がディーツ書店 Dietz Verlag から出されるであろう。『剩餘價值學說史』についてはやはりドイツ語版が authentisch と見るべきであろう。

なお、本書の書評その他は、つぎのとおり、ソ同盟の雑誌に發表されている。——А. Тушунов, Новое издание «Теорий прибавочной стоимости» К. Маркса. «Коммунист», No. 12, август 1954 г.; И. Прейс, Великое историко-критическое произведение Карла Маркса. (Квыходу в свет первой части «Теорий прибавочной стоимости»), «Вопросы Экономики», No. 8, август 1945 г.

以上で、表記のようなテーマについて、きわめて粗雑な、書誌學的紹介をおわる。この一文は、もともと、草稿のうちに走り書きされた、資料メモにすぎない。もっと實質的な内容紹介は、いずれ、多くの専門学者によってなされるであろうことを、この際、希望しておきたい。

(1954.11.22)